

GB012a: 粘性流体の扱いについて

本 whitepaper は Gunnar Backstrom 氏の承諾のもと、書籍“*Simple Fields of Physics by Finite Element Analysis*” に記されている多数の FlexPDE 適用事例の中からその一部を紹介するものです。

1 連立偏微分方程式

粘性流体の運動は次の Navier-Stokes 方程式によって記述されます。

$$\frac{\partial \mathbf{u}}{\partial t} + (\mathbf{u} \cdot \nabla) \mathbf{u} = -\frac{1}{\rho} \nabla p + \nu \left[\nabla^2 \mathbf{u} + \frac{1}{3} \text{grad}(\text{div} \mathbf{u}) \right] + \mathbf{f} \quad (1)$$

ここに

- \mathbf{u} - 速度ベクトル
- \mathbf{f} - 単位体積当りの流体に加わる外力ベクトル
- ρ - 密度
- p - 圧力
- ν - 動粘性係数

を意味します。今、非圧縮性流体について考えることにすると、連続の式 (GB011 参照) より $\text{div} \mathbf{u} = 0$ が言えるため方程式は次のようになります。

$$\frac{\partial \mathbf{u}}{\partial t} + (\mathbf{u} \cdot \nabla) \mathbf{u} = -\frac{1}{\rho} \nabla p + \nu \nabla^2 \mathbf{u} + \mathbf{f} \quad (2)$$

ここで Backstrom 氏の記法に合わせるべく

- $\mathbf{u} \rightarrow \mathbf{v}$
- $\rho \rightarrow \rho_0$
- $\rho_0 \mathbf{f} \rightarrow \mathbf{F}$
- $\rho_0 \nu \rightarrow \eta$

という書換えを行うと方程式は

$$\rho_0 \frac{\partial \mathbf{v}}{\partial t} + \rho_0 (\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v} - \mathbf{F} + \nabla p - \eta \nabla^2 \mathbf{v} = 0 \quad (3)$$

となります。

今、2次元の流れに話を限ることにし、ベクトル表記を成分表記に改めて書くと方程式 (3) は次のような連立偏微分方程式となります。

$$\rho_0 \begin{Bmatrix} \frac{\partial v_x}{\partial t} \\ \frac{\partial v_y}{\partial t} \end{Bmatrix} + \rho_0 (\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v} - \begin{Bmatrix} F_x \\ F_y \end{Bmatrix} + \begin{Bmatrix} \frac{\partial p}{\partial x} \\ \frac{\partial p}{\partial y} \end{Bmatrix} - \eta \begin{Bmatrix} \frac{\partial^2 v_x}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 v_x}{\partial y^2} \\ \frac{\partial^2 v_y}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 v_y}{\partial y^2} \end{Bmatrix} = 0 \quad (4)$$

ここで非線形項である第 2 項はベクトル形式のままに残っていますが、これは Reynolds 数

$$\text{Re} = \frac{\rho_0 v_0 L_0}{\eta} \quad (5)$$

が十分小さい値のときには粘性項 (第 5 項) に比べ第 2 項が無視できることを企図してのことです (v_0, L_0 はそれぞれ解ドメイン中における典型的な速度、典型的な長さを意味します)。この場合、方程式は線形となり層流に対応した解が導かれることになります。

ところで従属変数は v_x, v_y, p の 3 つであるため、Navier-Stokes の方程式 (4) だけでは不十分です。これを補うものが質量保存則から導かれる連続の式 (GB011 参照)

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \nabla \cdot \rho \mathbf{v} = 0$$

です。特に非圧縮定常流の場合には

$$\nabla \cdot \mathbf{v} = \frac{\partial v_x}{\partial x} + \frac{\partial v_y}{\partial y} = 0 \quad (6)$$

となります。ただし 1 階の偏微分方程式を方程式 (4) と組み合わせるのは何か問題があるためか、Backstrom 氏は Navier-Stokes 方程式 (3) に発散演算子 $\nabla \cdot$ を適用、それと (6) を組み合わせることによって第 3 の方程式を誘導しています。すなわち $\nabla \cdot$ を適用することによって

$$\rho_0 \frac{\partial}{\partial t} \nabla \cdot \mathbf{v} + \rho_0 \nabla \cdot [(\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v}] - \nabla \cdot \mathbf{F} + \nabla^2 p - \eta \nabla \cdot (\nabla^2 \mathbf{v}) = 0$$

ここで $\nabla \cdot \mathbf{v} = 0$ より第 1 項は消えます。さらに最終項も

$$\nabla \cdot (\nabla^2 \mathbf{v}) = \nabla^2 (\nabla \cdot \mathbf{v}) = \nabla^2 (0) = 0$$

と変形することによって消せるため、修正型の N-S 方程式

$$\nabla^2 p + \rho_0 \nabla \cdot [(\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v}] - \nabla \cdot \mathbf{F} = 0 \quad (7)$$

が誘導されます。直交座標系での成分表示に改めると

$$\frac{\partial^2 p}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 p}{\partial y^2} + \rho_0 \nabla \cdot [(\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v}] - \left(\frac{\partial F_x}{\partial x} + \frac{\partial F_y}{\partial y} \right) = 0 \quad (8)$$

のようになります (ここでも $\rho_0 \nabla \cdot [(\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v}]$ という項は無視するためベクトル表記のままに留めてあります)。

ただし方程式 (8) を (4) と組み合わせた場合、その解が $\nabla \cdot \mathbf{v} = 0$ を満たすという保証がありません。そこで問題によっては (8) に $\nabla \cdot \mathbf{v}$ の項を意図的に追加した

$$\frac{\partial^2 p}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 p}{\partial y^2} + \rho_0 \nabla \cdot [(\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v}] - \left(\frac{\partial F_x}{\partial x} + \frac{\partial F_y}{\partial y} \right) - f_{\nabla} \nabla \cdot \mathbf{v} = 0 \quad (9)$$

を使用することもあります。ただし $\nabla \cdot \mathbf{v} = 0$ を満たす解が誘導されるように、 f_{∇} の値は問題に応じて調節する必要があります (試行錯誤を伴います)。なお、 f_{∇} の次元を考慮し以降では

$$f_{\nabla} = C \frac{\eta}{L_0^2} \quad (10)$$

という表現を用いることにし、 C の値を適宜調整することにします。

2 境界条件

圧力に関する境界条件を指定する場合、その値を設定する Dirichlet 型境界条件 (VALUE 文) については何も迷うことはありません。しかし自然境界条件 (NATURAL 文) の場合には少々考慮が必要です。自然境界条件の場合、境界上での外向きの単位法線ベクトルを \mathbf{n} とすると

$$\frac{\partial p}{\partial n} = \mathbf{n} \cdot \nabla p$$

と記述できます。一方、N-S 方程式より

$$\nabla p = \mathbf{F} + \eta \nabla^2 \mathbf{v} - \rho_0 \frac{\partial \mathbf{v}}{\partial t} - \rho_0 (\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v}$$

従って

$$\begin{aligned} \frac{\partial p}{\partial n} &= \mathbf{n} \cdot \nabla p \\ &= \mathbf{n} \cdot \mathbf{F} + \eta \mathbf{n} \cdot \nabla^2 \mathbf{v} - \rho_0 \mathbf{n} \cdot \frac{\partial \mathbf{v}}{\partial t} - \rho_0 \mathbf{n} \cdot [(\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v}] \\ &= n_x F_x + n_y F_y + \eta [n_x \nabla^2 v_x + n_y \nabla^2 v_y] - \rho_0 \mathbf{n} \cdot \frac{\partial \mathbf{v}}{\partial t} - \rho_0 \mathbf{n} \cdot [(\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v}] \end{aligned} \quad (11)$$

ここで数式 (11) において、定常流の場合には $\rho_0 \mathbf{n} \cdot \frac{\partial \mathbf{v}}{\partial t}$ の項が消え、また Re の値が十分小さい場合には $\rho_0 \mathbf{n} \cdot [(\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v}]$ の項が無視できる形となります。

3 $\text{Re} \ll 1$ の場合の定常流

本章では定常流についてのみ考えることにします。このため時間微分の項は省略できます。また Reynolds 数 Re が十分小さいケースに話を限定すれば $\rho_0 (\mathbf{v} \cdot \nabla) \mathbf{v}$ という非線形項も無視することができます。また 2 次元の流れということで外力の項も無視できる環境では、数式 (4), (9) は次のように簡単な式となります。

$$\begin{pmatrix} \frac{\partial p}{\partial x} \\ \frac{\partial p}{\partial y} \end{pmatrix} - \eta \begin{pmatrix} \frac{\partial^2 v_x}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 v_x}{\partial y^2} \\ \frac{\partial^2 v_y}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 v_y}{\partial y^2} \end{pmatrix} = 0 \quad (12)$$

$$\frac{\partial^2 p}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 p}{\partial y^2} - C \frac{\eta}{L_0^2} \left(\frac{\partial v_x}{\partial x} + \frac{\partial v_y}{\partial y} \right) = 0 \quad (13)$$

特に簡単な流れの場合には $C = 0$ という形で発散項 $\nabla \cdot \mathbf{v}$ を含めなくても解を求めることができます。一方、自然境界条件に関する式 (11) は次のようになります。

$$\frac{\partial p}{\partial n} = \eta [n_x \nabla^2 v_x + n_y \nabla^2 v_y] \quad (14)$$

■